

阿刀田高著「初めが肝心」J2TOP(ジェイツートップ)

2010年3月号、内外情勢調査会、時事通信社刊を読む

初めが肝心

1. (1)「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」
- (2)「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」
- (3)「私が自分に祖父のある事を知ったのは、私の母が産後の病気で死に、その後2月程経って、不意に祖父が私の前に現れて来た、その時であった」
- (4)「死者たちは、濃褐色の液に浸って、腕を絡みあい、頭を押しつけあって、ぎっしり浮かび、また半ば沈みかかっている」
- (5)「安田辰郎は、1月13日の夜、赤坂の割烹料亭「小雪」に一人の客を招待した」
- (6)「堀川の大殿様のような方は、これまでは固<sup>もと</sup>より、後の世にも恐らく2人といらっしやいますまい」
- (7)「指先から煙草が落ちたのは、月曜の夕方だった」
- (8)「越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いている」
- (9)「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている」
- (10)「おい、地獄さ行<sup>え</sup>ぐんだで！」

2. 思いつくままに日本の名作小説十編の冒頭を抜き出してみた。まるでクイズみたい。どれが、だれの、どの作品か、おわかりだろうか。

3. 読者はなにげなく読むケースが多いけれど、作者のほうは冒頭の一節には神経を使う。熟慮する。こう書こうか、ああ書こうか、少なからず思い悩むのが通例だ。私自身の場合を述べれば、白い原稿用紙を前にして、

- よし、これでいい。これで行こう -

冒頭がきっちりと決まれば、

- 今日の仕事はこれでおしまい。 -

へへ、呑気だね。酒を飲もうと、遊びに出ようと、いっこうにかまわない。

「たった一行でいいんですか」

と聞かれそうだが、冒頭を決めるということは、どんなタイプの作品か、ミステリーなのか、歴史小説なのか、私小説なのか、方法ははっきりと定まっている。それがなければ一行とて書けない。おそらく主人公のイメージもできているだろうし、ストーリーのあらましも心中にある。逆に言え

ば、そういう構想があって初めて第一行目が書ける。一日酒を飲んでいても“乞う明日から”でさしつかえない。

5．小説家の場合はやや特殊かもしれないけれど、一般論としても、文章を書くときには、同様の方法を保持したほうがよいのではあるまいか。報告書であれ、マニュアルであれ、手紙であれ(これは冒頭に決まり文句のようなものがあり、ここではそれに続く部分...“さて”と記して本題に入るあたりがポイントとなるだろうが)なことから書き起こすか、用件全体を展望し、どう訴えるのがよいか、吟味することが絶対に必要だろう。

6．簡潔がいい。単刀直入のほうが、わかりやすいだろう。

7．十のことを訴えるのに「一、二、三、四、...」と順を追って説明する方法もあるが、まず端的に結論を(大ざっぱでも、はっきりしたものを)提示し、こまかいことは後から、という方便も有効だ。たとえば、色合いを言うのに

「ひとことで言えば玉虫色です。が、緑が濃く金を殺して深めで、曖昧な印象ではありません。そのためには、染料を使い...」という表現だ。

8．もちろんケース・バイ・ケース。ただし第一行目の持つ重要性はつねに忘れてはなるまい。“初めが肝心”は文章を、言葉を操るための金言でもある。

\*クイズの答は作者を省略して、(1)雪国、(2)坊ちゃん、(3)暗夜行路、(4)死者の奢り、(5)点と線、(6)地獄変、(7)かわうそ、(8)山椒太夫、(9)坂の上の雲、(10)蟹工船

[コメント]

時事通信社の内外情勢調査会の月刊機関誌 J2TOP に連載した阿刀川氏の最終回が「初めが肝心」とは。興味が尽きない。

- 2010年2月22日 林明夫記 -